

## 講演『政府通貨と所得保証による経済の再生を』について

並木和夫

はじめに

素朴な疑問。今のデフレを解消するにはどうすれば良いのでしょうか？金融政策は無効、財政政策も政府に予算・財源が無いため出動できず。古今の著名な経済・財政学者の高等な理論でも解決策が見出せません。

過去、苦肉の策として為政者は貨幣の改鑄、インフレ政策、徳政令（モラトリアム）等で乗り切ろうとしましたが、一時の効果しかなく、再び悪循環に陥りました。しかし、今日の、IT化の時代、善良無私の政府の行動がガラス張りで国民全員が支持し、政府行動を自由に監視できるとしたらどうでしょうか？政府貨幣（中央銀行の銀行券でなく）を発行することにより、デフレは回避できるかも知れません。さて、如何なものでしょうか？

私は、いつも妻に聞かれて返答に苦慮してきました。

評論家・思想史家の関 廣野氏の講演内容

過日（6月8日）のモラル会にて、評論家・思想史家の関 廣野氏から標記テーマでの講演がありました。デフレ脱却と最小限の社会保障確保をどう実現するか、関心が高まっている時期に誠に時宜を得た講演でした。妻の質問に回答できるような気もしてきました。わずか1時間のお話で、より詳しい内容は同氏の講演録『生きるための経済』（2009.3.8）を参照された方がベターです。

当日の概要は、英国のエンジニアでケインズも1目を置いた思想家であるクリフォード・ヒュー・ダグラスの社会信用論、A+B理論、パブリック・カレンダー、ベーシック・インカムを考えを紹介するとともに、これに関氏の考えを提案するものでした。

すなわち、①中央銀行（銀行券）や民間銀行（信用創造）でなく政府が政府紙幣を発行し、直接、市場の紙幣流通量を制御することにより、インフレ、デフレ状況をうまく解決できる、②社会的弱者の救済は政府財政資金（国民の納付金や掛け金でなく、税金により）による保証で行う、という提言です。

過去、政府自ら政府紙幣を発行しようとした為政者、リンカーン、ケネディ共に反対勢力により発行前後に暗殺されました。私の知る限りでは、一人、ヒトラーのみ強大な権力（全権付与法）を背景にシャハト総裁率いるライヒスバンクの新紙幣（レンテンマルク）発行により（有効需要創造政策と相まって）超インフレを克服したように思います。『ヒトラーの経済政策』『ヒトラーとケ

インズ』等の図書を参考にしてください。

## 講演、ダグラスについての考察

### ① ダグラスのA+B理論について

さて、ダグラス氏の理論はかなりの的を得ていると思いますが、  
A（労働者による生産、その成果としての賃金）+B（銀行借入による資本家の投資、その果実としての利潤）>A（労働者、資本家による消費） このため、常に生産全量が消費されずに余剰が発生する。これが、経済を縮小させ、不景気（デフレ）を現出させるという説明が数学者らしくないため、説得力が薄いと思われまゝ。数学者らしく、産業連関表的に数式で説明したいところですが（マルクスも同様の考えを持っていても、数式化できませんでしたが、、、）

ダグラスは、B（銀行借入による資本家の投資、その果実としての利潤）を少なくすべく、利子の無い政府融資（政府紙幣発行）による投資を提唱していますが、資本家の利潤を適正範囲に抑制する政策（過剰分を税金として吸収する方策）を講じないと、>A は続かざるを得ません。

ダグラスが数学的に説明できないなら、マルクスの貨幣論も同様です。

G—W—G ‘ 商業資本の行動方程式

G—P<sub>m</sub>—W—G ‘ 産業資本の行動方程式

A 資本家による剰余価値の収奪

ダグラスでは資本家に代わり、政府・国家が登場します。方法、運用を間違えれば国家独占資本となりかねません。1930年代のドイツでは独裁者故に成功し、見事な復興を成し得ました。

ケインズはご承知の通り、生産全量が消費されずに余剰が発生する場合に、有効需要創設のための人為的な財政出動、財政政策を説きました。

### ② パブリック・カレンシー

ダグラスは中央銀行でなく政府自身が貨幣、紙幣を創出し、調節し、回収します。正に、政府管理通貨制度です。ケインズの提案通り、一国内も、世界全体（バンコール）も制御可能としたら、素晴らしいものとなりましょう。（ちなみに、私は、学生時代、利子の付かない（むしろマイナスの利子の付く）貨幣、紙幣を提案し、ニツコールと名付けました）。

私利私欲のない為政者（神に近い）なら可能でしょう。

ダグラス、ケインズの貨幣論では、政府が経済を完璧に近くコントロール出来る権力、国民に支持された権力を持ち、きわめて数学的に財政出動、政府紙

幣発行量を調節出来ることが必要です。独裁者でなく、国の頂点に立った人間が個人の欲得なしに無私で調節出来るかが課題です。国王、首相、党が善良とは限らないからです。

銀行学派、通貨学派の数百年に及ぶ長年の論争は、まさにこの1点にありました。

不祥、私が貨幣理論研究に興味を持ったのは、真珠湾攻撃の頃、世界、日本で正しく、多くの専門家が銀行券の人為的なコントロールについて（できるかどうか、どうしたら可能か）激論していました。私の手元に、昭和16年6月10日発行の岩波書店発行のフラートン『通貨論』（当時60銭）、原書では『通貨調節論』、現物があります。

しかし、この考え方は、経済・金融専門家により、けんもほろろに否定されるようです。

貨幣の機能には価値尺度機能、交換機能、価値退蔵（保蔵）機能があります。このうち、価値退蔵機能を否定できれば良いのですが、高名な学者ではこれが不可能のようです。

#### 貨幣のあり方について

不祥、私は貨幣のこの価値退蔵機能を否定したいと考えます。江戸子のように『宵越しの金は持たね〜』貨幣を長く持ち、蓄えれば蓄えるほど、時間の経過とともに、貨幣が減価していく（今100の貨幣は消費しないと1年後には98に、2年後には96に減価します）システムを構築します。すると、国民は、貨幣を退蔵、死蔵しなくなります。消費、投資に充てられる結果、デフレは解消するでしょう。

この発想は、ミヒャエル・エンデの「利子を生まない貨幣論」、ルドルフ・シュタイナーの「老化する貨幣」、マルグリット・ケネデイの「利子ともインフレとも無縁な貨幣」（交換機能のみに限定したお金のシステム）、ゲゼルの「時とともに価値の減る自由貨幣」等によります。

ドイツ・バイエルンに位置するシュバーネンキルヘンでの自由貨幣の試み（1929~1931）、オーストリア、ザルツブルグ近郊のベルグルでの試みがあり、注目されています。

研究者は何故か議論されませんが、また、関係資料が抹殺されているため確認できませんが、当時の若きヒトラーは政府に頼まれてバイエルン地方の労働者党の内定・スパイをしており、スパイ活動の中からこの貨幣運動を知り、これならユダヤ資本家によるドイツ民族の搾取を止めさせられると思い、ドイツ労働者党の綱領、マニフェストに盟友ドレクスナーが「利子の付かない貨幣

発行」を盛り込み、実行しようとした。その後、国家社会主義ドイツ労働者党、すなわちナチ党としての最終綱領では資本家の利潤没収条項が入り、削除されます。ドレクスナーは最後まで抵抗したようですが、突撃隊の脅しに沈黙し、最終綱領もクルップ財閥の献金により事実上、反故にされたようです。NHK『エンデの遺言』その他を参照してください。(個人的な思いです。確証がありません。)

### ③ ベーシック・インカム

政府がどう社会的弱者を救済するか。

これまた、数百年来の論争テーマです。プルーDONは『貧困の哲学』にて問題提起しました。貧困は為政者の政策によると指摘しましたが、批判できない当時の事情から、神を持ち出して弱者救済を論じました。このため、マルクスにより『哲学の貧困』とおちょくられて挫折してしまいました。プルーDONはいい指摘、発想をしていたと思います。

どうやって貧困を解消できましょうか。マルクスのように革命を以ってしても、崩壊したソ連、中国、そして北の独裁世襲国では貧困は解消していません。

北欧諸国のような高い税負担国家（高率の消費税国家）では、経済成長と貧困解消が両立しています。日米のように低い税負担国家（累進所得税国家）ほど低成長、所得格差拡大、貧困を生んでいます。要は、国民が広く多くの国民を支えて行こうとの意思による差と思えます。

今回の講演は、大変難しい内容の問題提起であったことは、間違いありません。経済・金融学者より思想家、芸術家の構想が優れているように思えます。

いずれ、詳しく説明したいと思います。